| 受験番号 |
| --- |
| |

# 令和４年度 一般選抜 Ｉ期 入学試験問題

## 国　語（50分）

注 意 事 項

1．「始め」の合図があるまで，この問題冊子を開いてはいけません。

2．この問題冊子は全部で12ページです。印刷不鮮明などの箇所があった場合は申し出てください。

3．答えは解答用紙の所定の欄に記入してください。

4．使用する問題用紙と解答用紙の指定欄に**受験番号**（数字）を必ず記入してください。

5．解答作業には必ず**黒の鉛筆**（ＨＢ以上）または**シャープペンシル**を使用し，ボールペンや色鉛筆などを使ってはいけません。

6．試験終了後に，解答用紙，次に**問題冊子**を**回収**します。問題冊子の余白や裏面は，**下書きに使用してもかまいません**。

解答用紙は破ったり，汚したりしないでください。

7．「やめ」の合図で，すぐに筆記用具を置き，静かに待っていてください。

一

次の文章は２０２１年5月12日の新聞（河北新報）の社説からの抜粋である。但し設問の都合上、一部改変してある。これを読んで以下の問に答えなさい。

著作権の関係により掲載することができません

著作権の関係により掲載することができません

問1　文章中の空欄 1 ～ 9 は文章A～Iが入ります。最も適する順番に並び替えて、そのうち空欄 2 ・ 4 ・ 6 ・ 8 に入るものを記号で答えなさい。

問2　文章中の傍線部①～⑤の漢字の読みを平仮名で書きなさい。

① 該当
② 共助
③ 用途
④ 園庭
⑤ 着手

## 二

次の文章は太宰治が１９４２年に発表した『律子と貞子』の全文である。これを読んで以下の問に答えなさい。

大学生、三浦憲治君は、ことしの十二月に大学を卒業し、卒業と同時に故郷へ帰り、徴兵検査を受けた。①**キョクド**の近視眼のため、注1丙種でした、恥ずかしい気がします、と私の家へ遊びに来て報告した。

「田舎の中学校の先生をします。結婚するかも知れません。」

「もう、きまっているのか。」

「ええ。中学校のほうは、きまっているのです。」

「結婚のほうは、自信無しか。極度の近視眼は結婚のほうにも差支えるか。」

「まさか。」三浦君は苦笑して、次のような羨やむべき艶聞を語った。艶聞というものは、語るほうは楽しそうだが、聞くほうは、それほど楽しくないものである。私も我慢して聞いたのだから、読者も、しばらく我慢して聞いてやって下さい。

どっちにしたらいいか、迷っているというのである。姉と妹、一長一短で、どうも決心がつきません、というのだから贅沢な話だ。聞きたくもない話である。

三浦君の故郷は、甲府市である。甲府からバスに乗って御坂峠を越え、河口湖の岸を通り、船津を過ぎると、下吉田町という細長い山陰の町に着く。この町はずれに、どっしりした古い旅籠がある。問題の姉妹は、その旅館のお嬢さんである。姉は二十二、妹は十九。ともに甲府の女学校を卒業している。下吉田町の娘さん達は、たいてい谷村か大月の女学校へはいる。地理的に近いからだ。甲府は遠いので通学には困難である。けれども、町の所謂ものもちは、そのお嬢さん達を甲府市の女学校にいれたがる。理由のない②**ケンシキ**であるが、すこしでも大きい学校に子供をいれるという事は、所謂ものもちにとっては、一つの義務にさえなっているようである。姉も妹も、甲府女学校に在学中は、甲府市の大きい酒屋に寄宿して、そこから毎日、学校に通った。その酒屋さんと、姉妹の家とは、遠縁である。血のつながりは無い。すなわち三浦酒造店である。三浦君の生家である。

三浦君にも妹がひとりある。きょうだいは、それだけである。その妹さんは、二十。下吉田の姉妹と似た年である。だから三人姉妹のよう

に親しかった。三人とも、三浦君を「兄ちゃん」と呼んでいた。まず、今までは、そんな間柄なのだ。

三浦君は、ことしの十二月、大学を卒業して、すぐに故郷へ帰り徴兵検査を受けたが、極度の近視眼のために、不覚にも丙種であった。すると、下吉田の妹娘から、なぐさめの手紙が来た。あまり文章が、うまくなかったそうである。センチメンタル過ぎて、あまくて、三浦君は少し[a]閉口したそうである。けれども、その手紙を読んで、下吉田の姉妹を、ちょっと懐しく思ったそうである。丙種で、三浦君は少からず腐っていた矢先でもあったし、気晴しに下吉田のその遠縁の旅館に、遊びに行こうと思い立った。

姉は律子。妹は貞子。之は、いずれも仮名である。本当の名前は、もっと立派なのだが、それを書いては、三浦君も困るだろうし、姉妹にも迷惑をかけるような事になるといけないから、こんな仮名を用いるのである。

三浦君が甲府からバスに乗って、もう雪の積っている御坂峠を越え、下吉田町に着いた頃には日も暮れかけていた。寒い。外套の襟を立てて、姉妹の旅館にいそいだ。

途中で逢ったというのである。姉妹は、呉服屋さんの店先で買い物をしていた。

「律ちゃん。」なぜだか、姉のほうに声をかけた。

「あら。」と、あたりかまわぬ大声を出して、買い物を店先に投げとばし、ころげるように走って来たのは、律ちゃんではなかった。貞ちゃんのほうであった。

律子は、ちらと振り返っただけで、買い物をまとめて、風呂敷に包み、それから番頭さんにお辞儀をして、それから澄まして三浦君のほうにやって来て、三浦君から十メートルもそれ以上も離れたところで立ち止り、ショオルをはずして、叮嚀にお辞儀をした。それから、少し笑って、

「節子さんは？」と言った。節子というのは、三浦君の妹の名前である。

律子にそう言われて、三浦君は、[A]どぎまぎした。なるほど、妹も一緒に連れて来たほうが自然の形なのかも知れぬ。なんだか、みんな見抜かれてしまったような気がして、頬がほてった。

「急に思いついて、やって来たのですよ。こんど田舎の中学校につとめる事になったので、その挨拶かたがた。」しどろもどろの、まずい弁解であった。

「行こ行こ。」妹の貞子は、二人を促し、さっさと歩いて、そうして、ただもう、にこにこしている。「久し振りね、実に、久し振りね、夏にも来てくださらなかったしさ、それから、春にも来てくださらなかったしさ、そうだ、ひどいひどい、去年の夏も来なかったんだ、なあんだ、貞子が卒業してから一回も吉田へ来なかったじゃないか、ばかにしてるわ、東京で文学をやってるんだってね、すごいねえ、貞子を忘れちゃったのね、堕落しているんじゃない？　兄ちゃん！　こっちを向いて、顔を見せて！　そうれ、ごらん、心にやましきものがあるから、こっちを向けない、堕落してるな、さては、堕落したな、丙種になるのは当り前さ、丙種だなんて、貞子が世間に恥ずかしいわ、志願しなさいよ、可哀想に可哀想に、男と生れて兵隊さんになれないなんて、私だったら泣いて、そうして、血判を押すわ、血判を三つも四つも押してみせる、兄ちゃん！　でも本当はねえ、貞子は同情してるのよ、あの、あたしの手紙読んだ？　下手だったでしょう？　おや、笑ったな、ちきしょうめ、あたしの手紙を軽蔑したな、そうよ、どうせ、あたしは下手よ、おっちょこちょいの化け猫ですよ、あたしの手紙の、深いふかあい、まごころを蹂躙するような悪漢は、のろって、のろって、のろって、のろい殺してやるから、そう思え！　なんて、寒くない？　吉田は、寒いでしょう？　その頸巻、いいわね、誰に編んでもらったの？　いやなひと、にやにや笑いなんかしてさ、知っていますよ、節ちゃんさ、兄ちゃんにはね、あたしと節ちゃんと二人の女性しか無いのさ、なにせ丙種だから、どこへ行ったって、もてやしませんよ、そうでしょう？　それだのに、意味ありげに、にやにや笑って、いかにも他にかくれたる女性でもあるような振りして、わあい、見破られた、ごめんね、怒った？　文学をやってるんですってね？　むずかしい？　お母さんがね、けさね、大失敗したのよ、そうしてみんなに軽蔑されたの、あのね、――」とめどが無いのである。

「貞子。」と姉は口をはさんだ。「私はお豆腐屋さんに寄って行くからね、あなた達さきに行ってよ。」

「豆腐屋？」貞子は少し口をとがらせて、「いいじゃないか。一緒に帰ろうよ。いいじゃないか。お豆腐なんて、無いにきまっているんだ。」

「いいえ。」律子は落ちついている。「けさ、たのんで置いたのよ。いま買って置かなければ、あしたのおみおつけの実に困ってしまう。」

「商売、商売。」貞子は、あきらめたように[b]合点合点した。「じゃ、あたし達だけ、先に行くわよ。」

「どうぞ。」律子は、わかれた。旅館には、いま、四、五人のお客が滞在している。朝のおみおつけを、出来るだけ、おいしくして差し上げなければならぬ。

律子は、そんな子だった。しっかり者。顔も細長く蒼白かった。貞子は丸顔で、そうしてただ騒ぎ廻っている。その夜も貞子は、三浦君の傍に附き切りで、頗るうるさかった。

「兄ちゃん、少し痩せたわね。ちょっと凄味が出て来たわ。でも色が白すぎて、そこんとこが気にいらないけど、でも、それでは貞子もあんまり慾張りね、がまんするわよ、兄ちゃん、こんど泣いた？　泣いたでしょう？　いいえ、[注2]ハワイの事、決死的大空襲よ、なにせ生きて帰らぬ覚悟で母艦から飛び出したんだって、泣いたわよ、三度も泣いた、姉さんはね、あたしの泣きかたが大袈裟で、気障ったらしいと言ったわ、姉さんはね、あれで、とっても口が悪いの、あたしは可哀想な子なのよ、いつも姉さんに怒られてばっかりいるの、立つ瀬が無いの、あたし職業婦人になるのよ、いい勤め口を捜して下さいね、あたし達だって徴用令をいただけるの、遠い所へ行きたいな、うそ、あんまり遠くだと、兄ちゃんと逢えないから、つまらない、あたし夢を見たの、兄ちゃんが、とっても③**ハデ**な絣の着物を着て、そうして死ぬんだってあたしに言って、富士山の絵を何枚も何枚も書くのよ、それが書き置きなんだってさ、おかしいでしょう？　あたし、兄ちゃんも文学のためにとうとう気が変になったのかと思って、夢の中で、ずいぶん泣いたわ、おや、ニュースの時間、茶の間へラジオを聞きに行きましょう、兄ちゃん今夜、サフォの話を聞かせてよ、こないだ貞子はサフォの詩を読んだのよ、いいわねえ、いいえ、あたしなんかには、わからないの、でもサフォは可哀想なひとね、兄ちゃん知ってるでしょう？　なんだ、知らないのか。」やはり、どうにも、うるさいのである。律子は、台所で女中たちと共にお膳の後片附けやら、何やらかやらで、いそがしい。ちっとも三浦君のところへ話しに来ない。三浦君は少し物足りなく思った。

あくる日、三浦君は、おいとまをした。バスの停留所まで、姉と妹は送って出た。その途々、妹は[c]駄々をこねていた。一緒にバスに乗って船津までお見送りしたいというのである。姉は一言のもとに、はねつけた。

「私は、いや。」律子には、いろいろ宿の用事もあった。のんきに遊んで居られない。それに、三浦君と一緒にバスに乗って、土地の人から、つまらぬ誤解を受けたくなかった。おそろしかった。けれども貞子は平気だ。

「わかってるわよ。姉さんは④**モハンテキ**なお嬢さんだから、軽々しくお見送りなんか出来ないのね。でも、あたしは行くわよ。もうまた、しばらく逢えないかも知れないんだものねえ。あたしは断然、送って行く。」

停留所に着いた。三人、ならんで立って、バスを待った。お互いに気まずく無言だった。

「私も、行く。」幽かに笑って、[B]律子が呟いた。

「行こう。」貞子は勇気百倍した。「行こうよ。本当は、甲府まで送って行きたいんだけど、がまんしよう。船津まで、ね、一緒に行こうよ。」

「きっと、船津で降りるのよ。町の、知ってる人がたくさんバスに乗っているんだから、私たちはお互いに澄まして、他人の振りをしているのよ。船津でおわかれする時にも、だまって降りてしまうのよ。私は、それでなくちゃ、いや。」律子は用心深い。

「それで結構。」と三浦君は思わず口を滑らせた。

バスが来た。約束どおり三浦君は、姉妹とは全然他人の振りをして、ひとりずっと離れて座席にすわった。なるほど、バスの乗客の大部分はこの土地の人らしく、美しい姉妹に慇懃な会釈をする。どちらまで？　と尋ねる人もある。

「は、船津まで、買い物に。」律子は澄まして嘘を吐いている。完全に、三浦君の存在を忘れているみたいな様子だ。けれども、貞子は、下手くそだ。絶えず、ちらちらと三浦君のほうを見ては、ぷっと噴き出しそうになって、あわてて窓の外を眺めて、笑いをごまかしている。松の並木道。坂道。バスは走る。

船津。湖水の岸に、バスはとまった。律子は土地の乗客たちに軽くお辞儀をして、静かに降りた。三浦君のほうには[d]一瞥もくれなかったという。降りてそのまま、バスに背を向けて歩き出した。貞子は、あわてそそくさと降りて、三浦君のほうを振り返り振り返り、それでも姉の後に附いて行った。

三浦君のバスは動いた。いきなり妹は、くるりとこちらに向き直って一散に駈けた。バスも走る。妹は、泣くように顔をゆがめて二十メートルくらい追いかけて、立ちどまり、

「兄ちゃん！」と高く叫んで、片手を挙げた。

以上は、三浦君の羨やむべき艶聞の大略であるが、さて問題は、この姉と妹、どちらにしたらいいか三浦君が迷っているという事にあるのだ。

三浦君は、私にも意見を求めた。私ならば一瞬も迷わぬ。[C]確定的だ。けれども、ひとの好ききらいは格別のものであるから、私は、はっきり具体的には指図できなかった。私は予言者ではない。三浦君の将来の幸、不幸を、たったいま責任を以て教えてあげる程の自信は無い。私は、その日、聖書の一箇所を三浦君に読ませた。

――イエス或村に入り給へば、マルタと名づくる女おのが家に迎へ入る。その姉妹にマリヤといふ者ありて、イエスの足下に坐し、御言を聴きをりしが、マルタ饗応のこと多くして心いりみだれ、御許に進みよりて言ふ「主よ、わが姉妹われを一人のこして働かするを、何とも思ひ給はぬか、彼に命じて我を助けしめ給へ」主、答へて言ふ「マルタよ、マルタよ、汝さまざまの事により思ひ⑤**ワズラ**ひて心労す。されど無くてならぬものは多からず、唯一つのみ、マリヤは善きかたを選びたり。此は彼より奪ふべからざるものなり。」（ルカ伝十章三八以下。）

私は、ただ読ませただけで、なんの説明も附加しなかった。三浦君は、首をかしげて考えていたが、やがて、淋しそうに笑って、D「ありがとう。」と言った。

けれども、それから十日ほど経って、三浦君から、姉の律子と結婚する事にきめました、という実に案外な手紙が来た。なんという事だ。私は、⑥**ギフン**に似たものを感じた。三浦君は、結婚の問題に於いても、やっぱり極度の近視眼なのではあるまいか。読者は如何に思うや。

注1　丙種…徴兵検査で身体上欠陥が多く、現役には不適だという評価

注2　ハワイの事…1941年12月8日に行われた真珠湾攻撃のこと。これによって太平洋戦争が開戦した。

問一　文章中の傍線部①～⑥のカタカナを漢字に直して楷書で書きなさい。

① **キョクド**
② **ケンシキ**
③ **ハデ**
④ **モハンテキ**
⑤ **ワズラ**
⑥ **ギフン**

問二　文章中の傍線部a～dの文章中でどのような意味で使われていますか。次の中ア～エの中から選び、記号で答えなさい。

a　閉口した

ア　癒やされた
イ　悲しくなった
ウ　がっかりした
エ　困った

b　合点合点した

ア　繰り返し笑った
イ　繰り返しからかった
ウ　繰り返し言い聞かせた
エ　繰り返しうなずいた

c　駄々をこねていた

ア　わがままをいっていた
イ　機嫌が悪くなっていた
ウ　遠回りしていた
エ　つぶやいていた

d　一瞥もくれなかった

ア　一礼もしなかった

イ　ちらりとも見なかった

ウ　一言も交わさなかった

エ　バス代の心配をしなかった

問三　文章中の傍線部A「どぎまぎした。」とあるが、それはなぜですか。次のア～オの中から最も適するものを選び、記号で答えなさい。

ア　姉妹と結婚したいと思っていたところ、姉妹両方に言い寄られて嬉しく感じて気持ちがたかぶったから。

イ　徴兵検査の不名誉を返上しようとやってきたのに、姉妹がかつてと変わらず接してくれたので拍子抜けしたから。

ウ　律子の丁寧な言動にすっかり心奪われて好意を抱いていたところ、声を掛けられて内心を見抜かれたと思ったから。

エ　徴兵検査の結果以来気分が落ち込んでいたところ、昔懐かしい姉妹に会えて元気を取り戻したから。

オ　姉妹に会いたかったのだという気持ちを自覚したと同時に、律子に全てを見透かされたと感じて動揺したから。

問四　文章中の傍線部B「律子が呟いた。」とあるが、それはなぜですか。次のア～オの中から最も適するものを選び、記号で答えなさい。

ア　密かに想いを寄せていた兄ちゃんと貞子が二人でバスに乗ってそのまま二人の仲が進展してしまうことに焦りを感じ、二人の妨害をしなければ想いを遂げられないと焦る気持ちがあったから。

イ　世間体を考えて見送りのため男とバスに同乗することにためらう気持ちもありながら、このまま会話もなくしばらく兄ちゃんに会えなくなることを残念に思う気持ちがあったから。

ウ　見送りのため男とバスに二人きりで乗ると貞子に良くない噂がたつかもしれないが、自分も行けば二人きりではなくなり貞子の世間体も保たれるのではないかと考えたから。

エ　旅館仕事に生き甲斐を感じ世間体も気にして男とバスに乗ることにためらいがあったが、いざ兄ちゃんと一緒に歩いているとだんだん良い気がして心が浮き立ってきたから。

オ　兄ちゃんが姉妹を手に入れたいという下心持っていることを見抜いている一方で貞子は気づいていないようなので、無警戒な貞子を兄ちゃんから守らねばならないという気持ちがあったから。

問五　文章中の傍線部C「確定的だ。」とあるが、それはなぜですか。次のア～オの中から最も適するものを選び、記号で答えなさい。

ア　徴兵検査が身体的理由により丙種で失意の底にある三浦君にとって、天真爛漫元気で活発な貞子こそふさわしいから。

イ　学校教員になる三浦君にとって、旅館の仕事に打ち込み世間体にも気を配れる模範的な律子こそふさわしいから。

ウ　会えない時は手紙で気にかけ、会えるとその喜びを素直に表現し、三浦君への好意を持ち続けている貞子こそふさわしいから。

エ　徴兵検査が丙種で落ち込んでいる三浦君にとって、どんなときも奥ゆかしく模範的な律子こそふさわしいから。

オ　徴兵検査の結果を始め世間体ばかりを気にしている三浦君にとって、世間体を気にせず行動できる貞子こそふさわしいから。

問六　文章中の傍線部D「『ありがとう。』と言った。」とあるが、それはなぜですか。次のア～オの中から最も適するものを選び、記号で答えなさい。

ア　律子を選ぶべきだと聖書に示され、自分の中にある律子への気持ちに気づけたことに感謝する気持ちになったから。

イ　自分のモテ話をしていい気分なのに聖書を示して貞子を選ぶべきだと示され、興醒めした気持ちになったから。

ウ　姉妹のどちらを選ぶか相談したのに、返事をもらえず冷たくあしらわれた事に寂しさを感じながらも話を聞いてくれたことに感謝を示したかったから。

エ　貞子を選ぶべきだと聖書に示され、自分の中にある律子への気持ちを諦めねばならないのかと残念に思ったから。

オ　律子を選ぶべきだと聖書に示され、自分を慕ってくれる貞子の気持ちに答える事が出来ないとわかり寂しくなったから。

―国語問題終了―